雌　阿　寒　岳

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

○火山活動評価

火山活動は、2024年３月から７月頃にかけてわずかな高まりが認められましたが、８月以降は低下して概ね静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況（2024 年７月～2025 年６月）

2024 年７月以降の発表履歴	現在の警報・予報（噴火警戒レベル、キーワード）
変更なし	噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）

○2024年７月～2025年６月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１～２、図３-①～⑥、図４-①②⑤、図５～６、図７-①、図８～14）

監視カメラによる観測では、各火口の噴気活動は低調な状態で推移しました。

2024年７月11日、８月21日及び９月４日に国土交通省北海道開発局、９月10日に第一管区海上保安本部の協力により上空からの観測を実施しました。７月の観測では、2022年９月の観測と比べてポンマチネシリ第３火口内にわずかな地熱域が認められましたが、８～９月には相当する地熱域は認められず、特段の変化は認められませんでした。

2024年９月10日～12日及び17日～20日に実施した現地調査では、各火口の噴気活動の状態や地表面温度分布には、昨年（2023年９月、10月）の観測時と比べて特段の変化は認められませんでした。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図７-②）

全磁力連続観測では、2024年３月から７月頃にかけて96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化の可能性を示す全磁力値の減少傾向がみられましたが、以降は概ね停滞しており、火山活動の活発化を示唆する特段の変化は認められていません。

・地震及び微動の発生状況（図３-⑦～⑧、図４-④⑦、図15～18）

ポンマチネシリ火口のごく浅い所～深さ０km付近では、2024年３月下旬から７月上旬にかけて振幅の小さな地震のわずかな増加が時々認められ、８月から９月中旬にかけてもやや多い状態で推移するなど地震活動にわずかな盛衰が認められましたが、11月頃以降は低調に経過しています。主な震源は上記のポンマチネシリ火口付近のほか、中マチネシリ火口の深さ０～１km付近にも分布しました。

2024年11月６日に、振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が発生しました。

・地殻変動の状況（図４-③⑥、図17、図19～21）

2024年11月６日に発生した火山性微動に伴い、ポンマチネシリ火口周辺の傾斜計及び広帯域地震計で火口方向が上がるわずかな傾斜変動を伴いました。

2024年９月10日～15日に実施したGNSS繰り返し観測によると、2020年以降、96-1火口付近を挟む基線で示すと考えられる伸長傾向が続いていました。また、中マチネシリ火口付近を挟む基線では、2019年以降、火口浅部の膨張を示すと考えられる基線の伸長が続いていました。

GNSS連続観測による山体を挟む基線では、2024年４月頃から６月頃に山体付近の膨張を示すと考えられる基線のわずかな伸長がみられましたが、以降、特段の変化は認められませんでした。

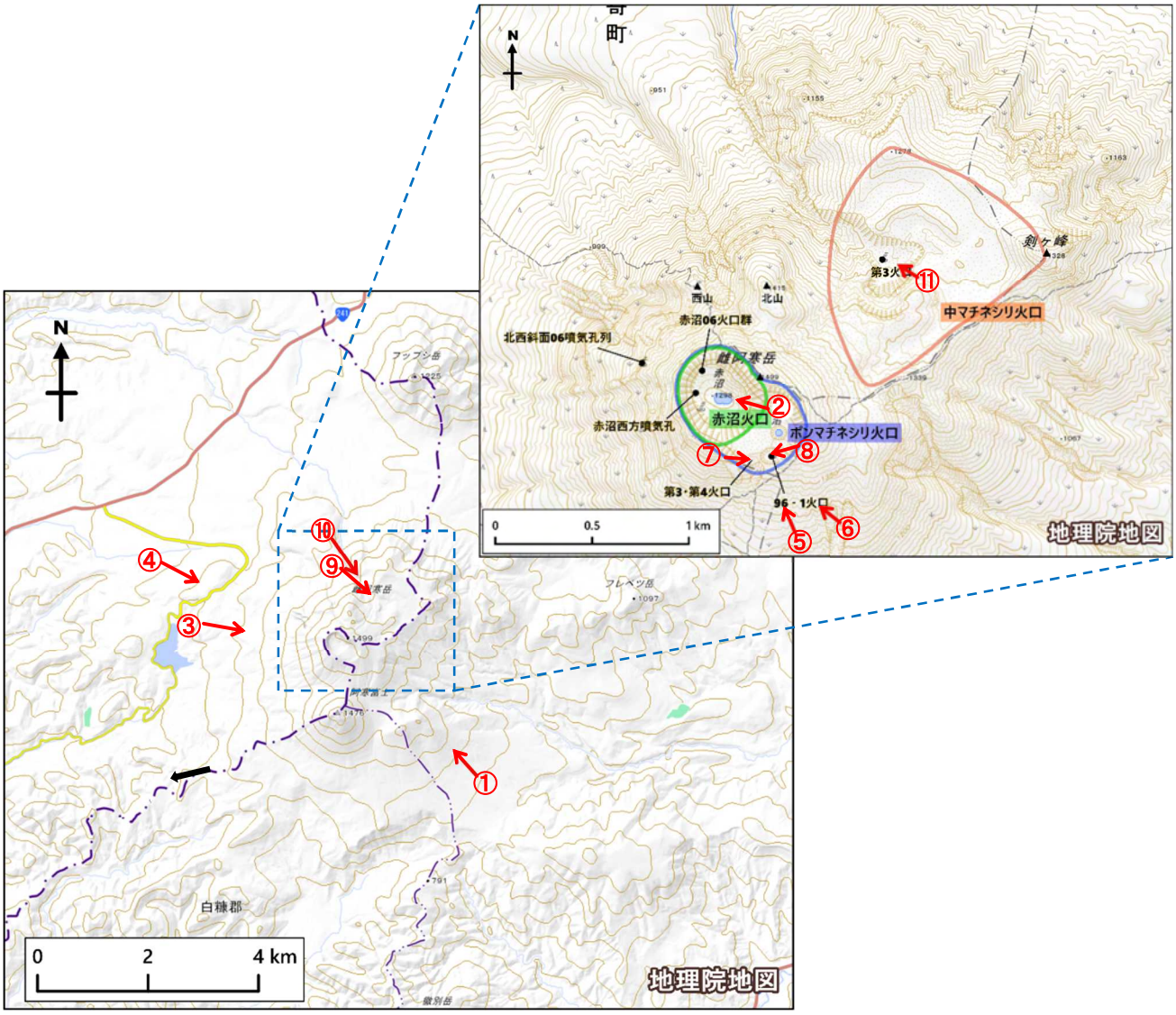


図１　雌阿寒岳　火口周辺図及び図２、図８～14の写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）

図２　雌阿寒岳　各火口の状況
南東側上空（図１の①）から撮影

・近年の上空から観測、現地調査と比較して、各火口の状況に特段の変化は認められませんでした。

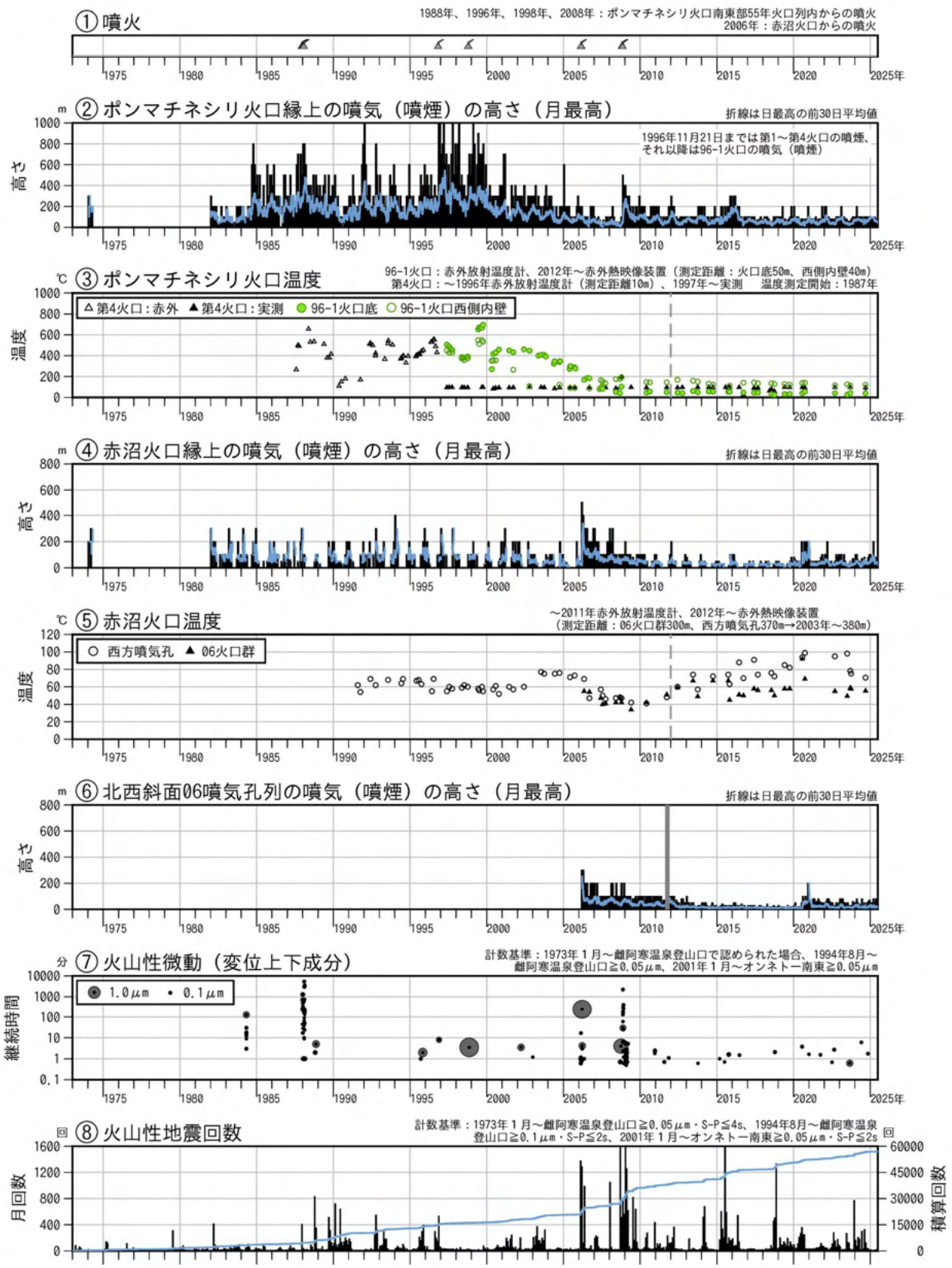


図３　雌阿寒岳　火山活動経過図（1973年１月～2025年６月）
⑥の灰色部分は機器障害による欠測を示します。
各火口の位置は図１を参照してください。

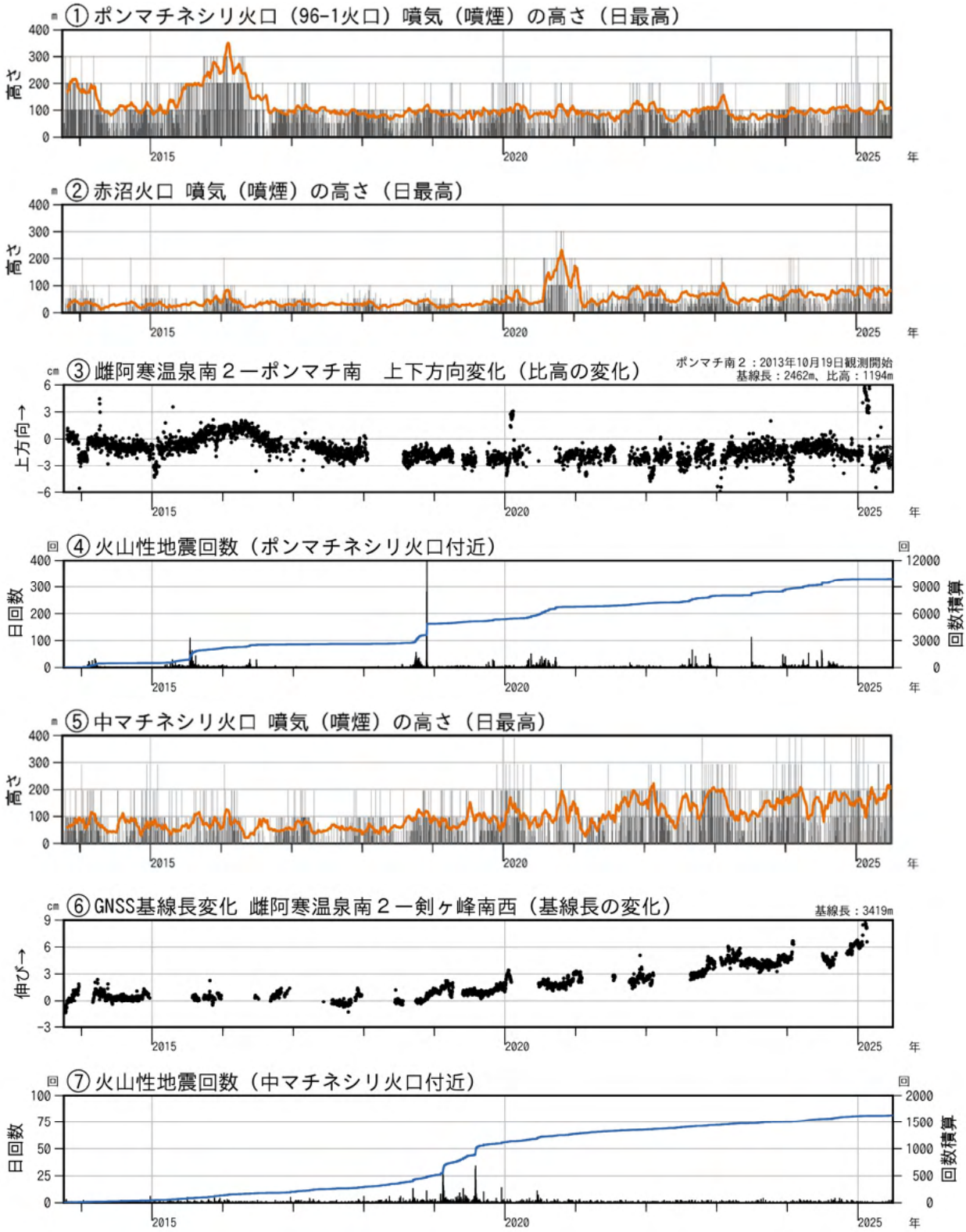


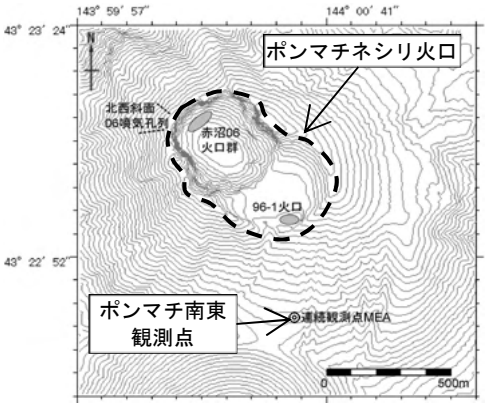
図４　雌阿寒岳　火口別の活動経過図（2013年10月～2025年６月）

・各火口の位置は図１を参照してください。
・①②⑤の橙線は気温補正をした噴気の高さを前30日平均して傾向を示したものです。
・グラフ③、⑥は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図21）基線④、⑦に対応しています。
・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。

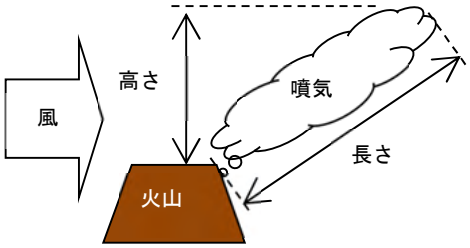
・ポンマチネシリ火口付近及び中マチネシリ火口付近の地震活動は低調に経過しており、特段の地殻変動は認められていません。また、噴気活動の状況に特段の変化は認められていません。

図５　雌阿寒岳　南東側から見た赤沼火口、96-1火口及び中マチネシリ火口の状況
（上徹別（かみてしべつ）監視カメラによる）

図６　雌阿寒岳　西側から見た赤沼火口及び北西斜面 06 噴気孔列の状況
（オンネトー展望台（道）監視カメラによる）



観測点配置図



噴気の高さと長さ

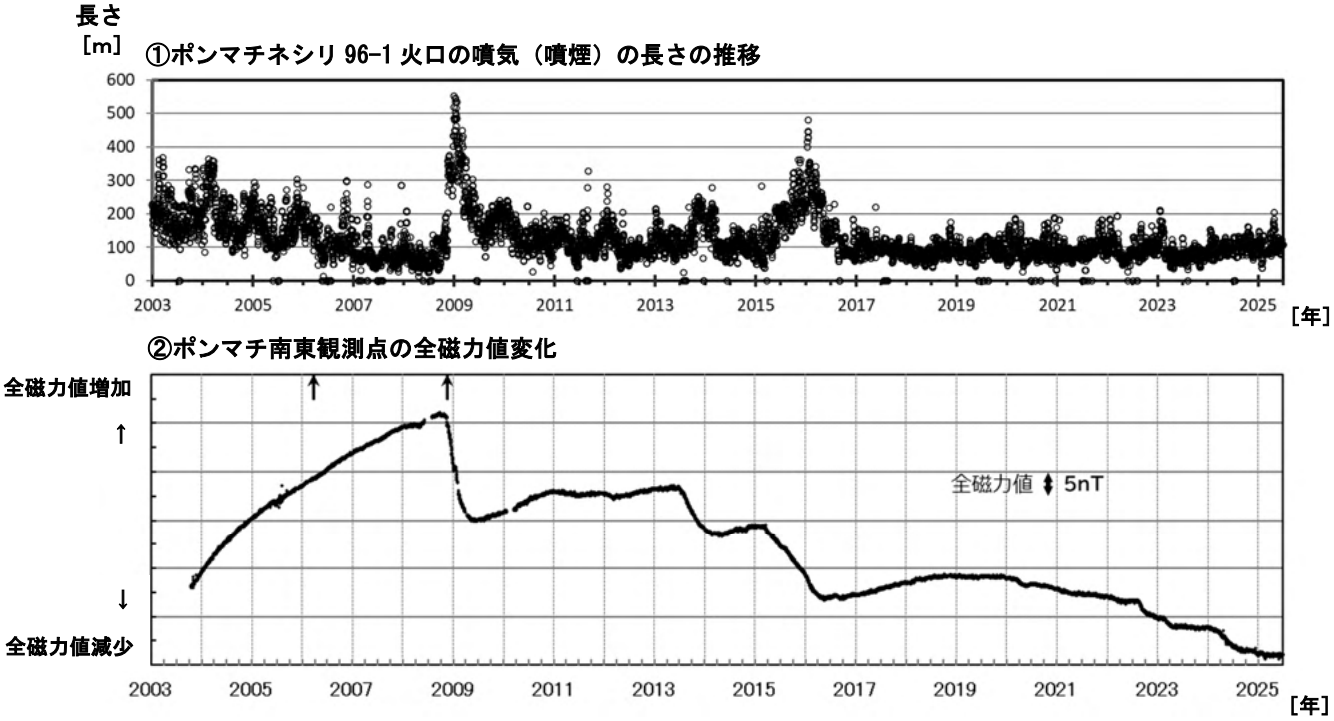


図７　雌阿寒岳　ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さと全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2025年６月）

・①のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
・②のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
・図中の↑は噴火を示します。

・2016年５月以降、96-1火口の噴気量は概ね低下した状態が続いています。
・ポンマチネシリ96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2024年３月頃から96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化の可能性を示す全磁力値の減少傾向がみられましたが、2024年７月以降は概ね停滞しています。
・中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

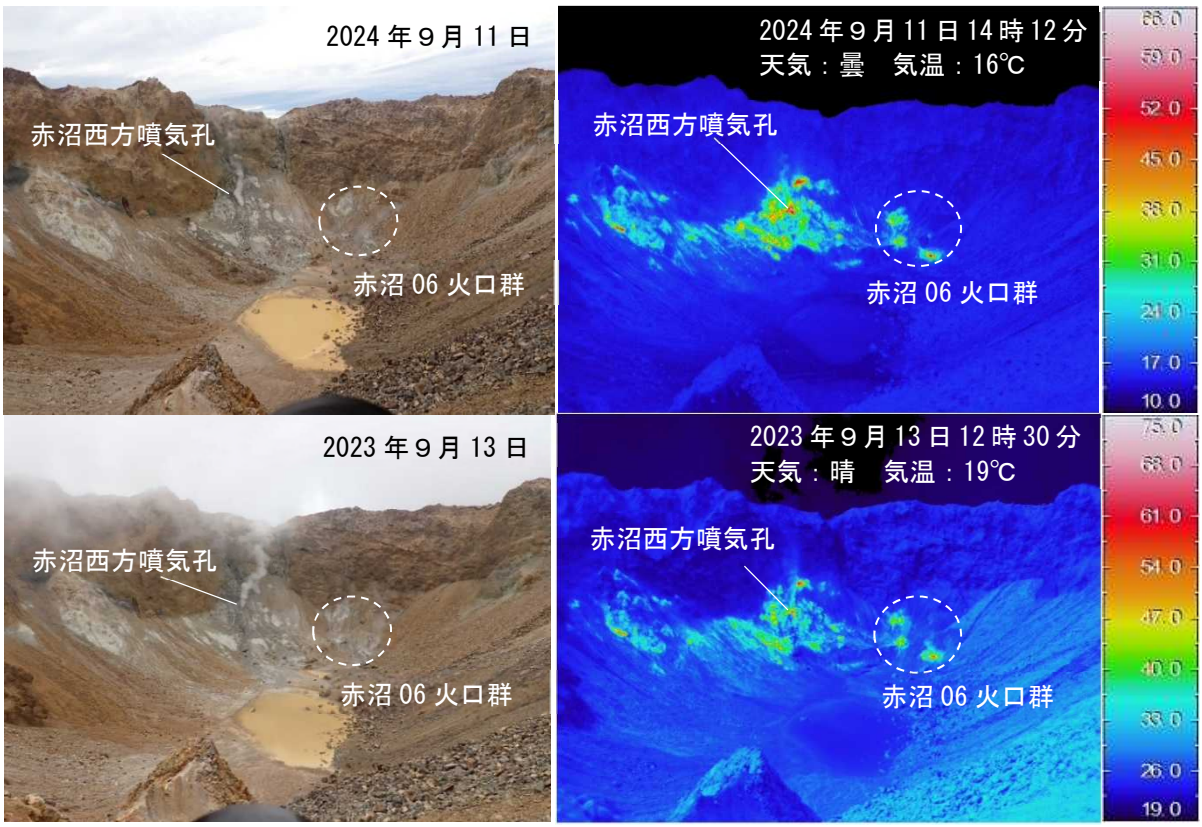


図８　雌阿寒岳　赤外熱映像装置による赤沼火口の地表面温度分布
東側（図１の②）から撮影
・2023 年９月の観測と比べて、地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。

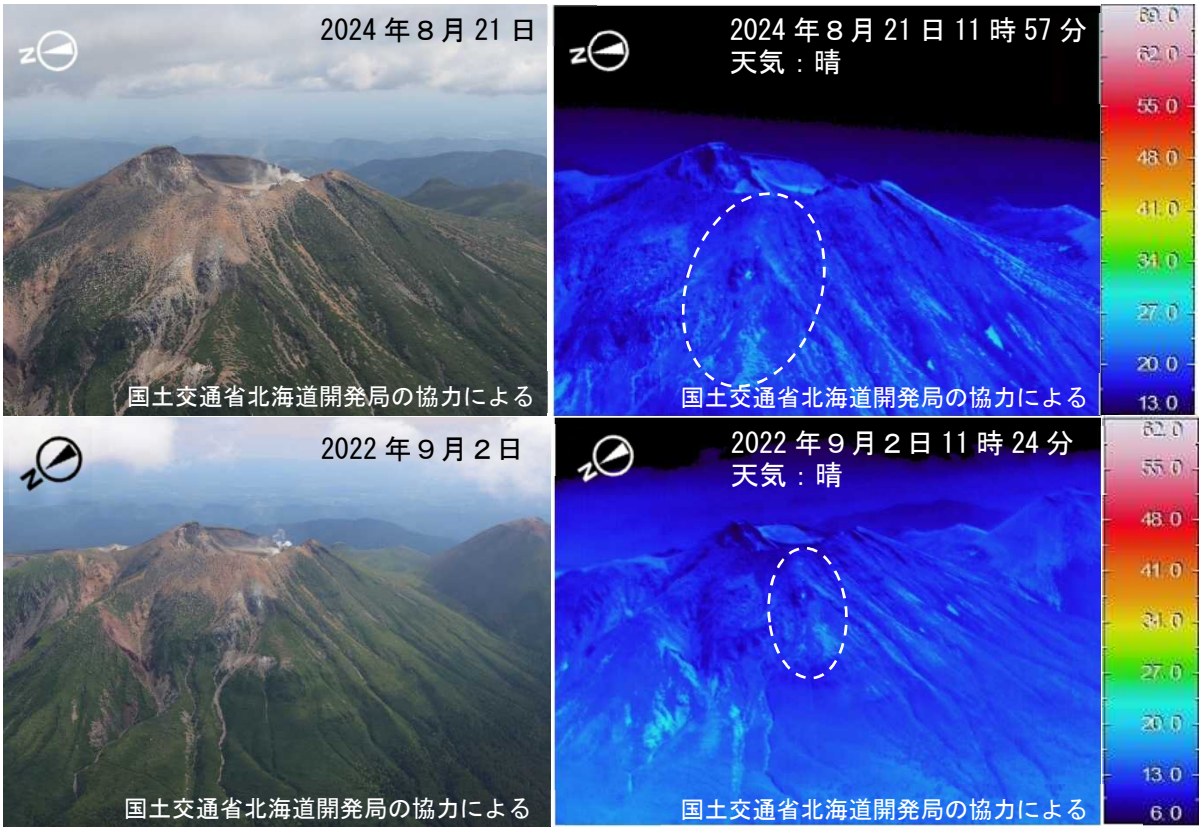


図９　雌阿寒岳　赤外熱映像装置による北西斜面 06 噴気孔列付近の地表面温度分布
上：西側上空（図１の③）から撮影　下：北西側上空（図１の④）から撮影
・噴気の状況や地熱域（白破線内）の状況に特段の変化は認められませんでした。

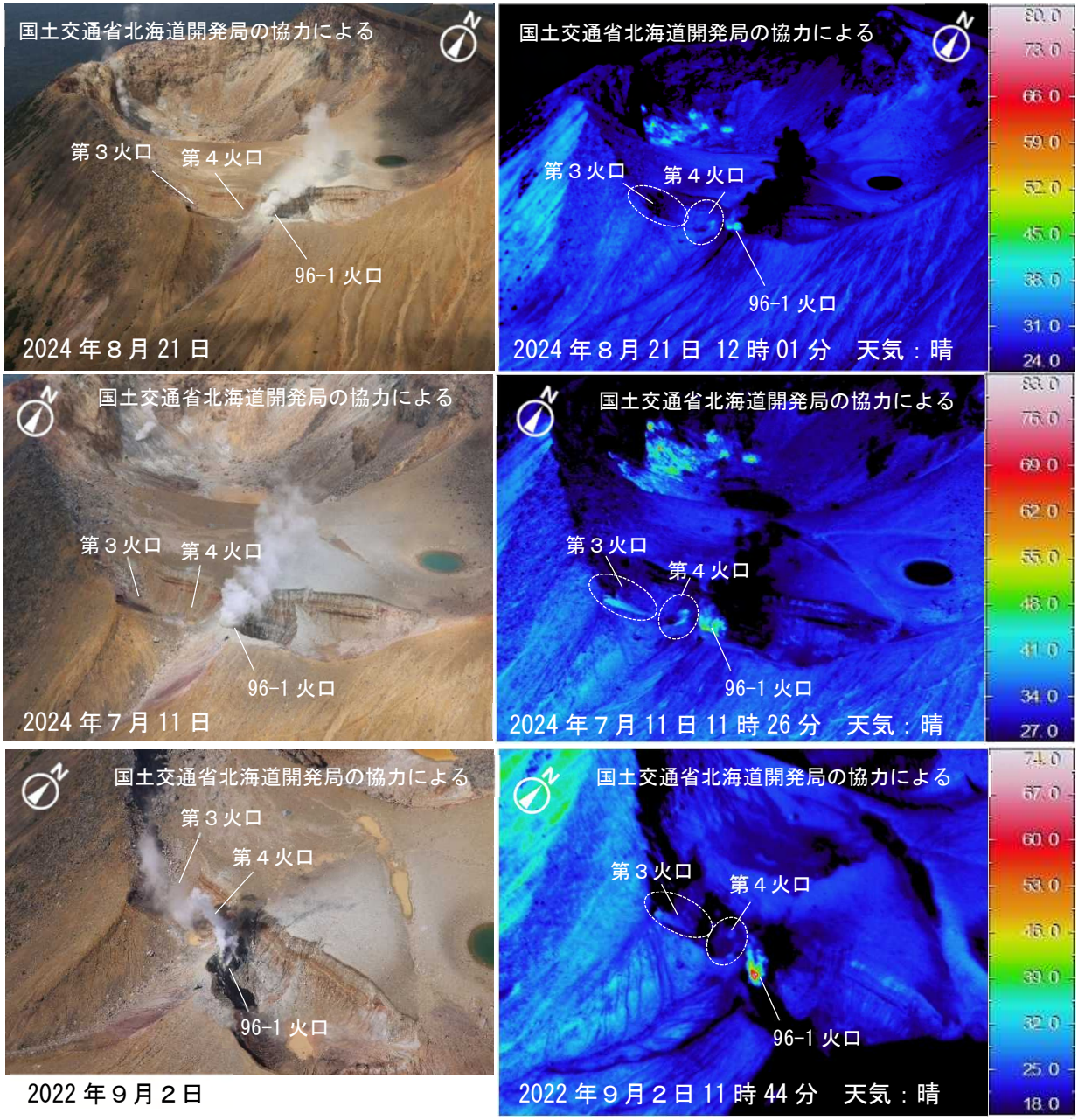


図 10　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ第３、第４火口の地表面温度分布
上、中：南東側上空（図１の⑤）から撮影　下：南東側上空（図１の⑥）から撮影

・2024 年７月 11 日の観測では、2022 年９月と比較して、第３火口、第４火口内でわずかな地熱域（白破線内）が認められました。
・2024 年８月 21 日の観測では、第４火口内では引き続き地熱域が認められましたが、第３火口では明瞭には認められませんでした。
・96-1 火口の噴気の状況には、特段の変化は認められませんでした。

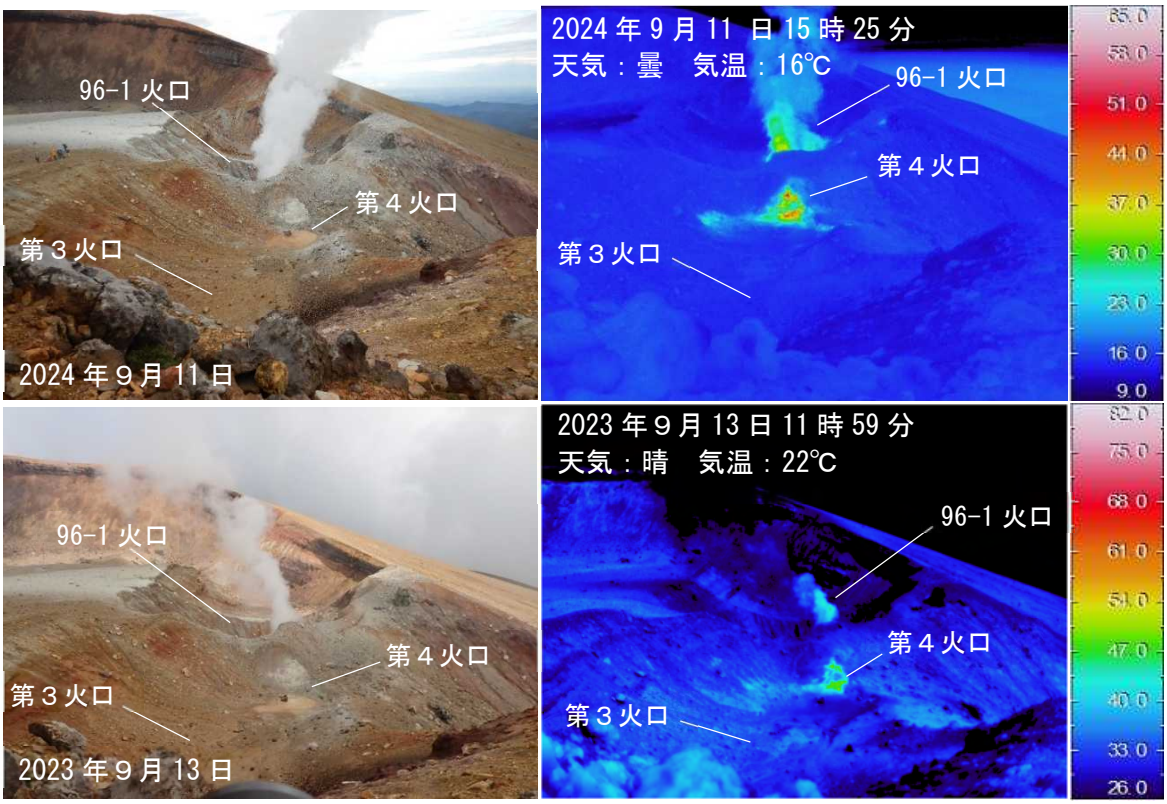


図 11　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ第３火口及び第４火口の地表面温度分布
西側（図１の⑦）から撮影

・前回の観測（2023 年９月）と比べて、地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。
・第３火口内では、７月に実施した上空からの観測で地熱域（図 10 参照）が認められましたが、８月に実施した上空からの観測と同様に地熱域は認められませんでした。

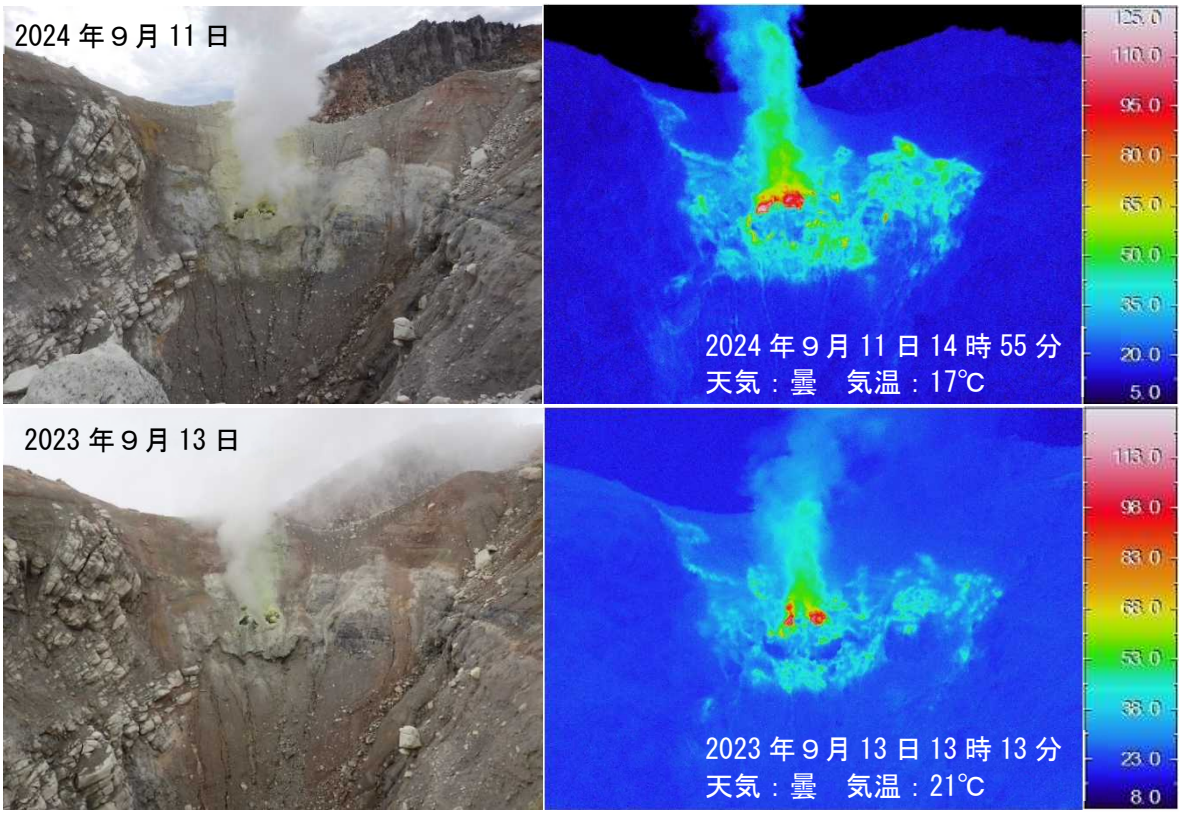


図 12　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ 96-1 火口の地表面温度分布
東側（図１の⑧）から撮影

・前回の観測（2023 年９月）と比べて、地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。